

『On-line みんなで法華経を学ぼう!』 vol.27 Jun.2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”!

(“法華経観”を見つける旅に出よう!)

『妙法蓮華経 薬王菩薩本事品 第二十三』 (本門・流通分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

<如来神力品の復習>

・迹門と本門の総まとめ

(P159・1行/P115・1行)

『如来神力品』も法華経二十八品のなかで、非常に大切な品です。なぜ大切であるかと言えば、迹門の教えと、本門の教えの「総まとめ」がしてあるからです。

○「迹門」とは：人間釈尊が悟られた教え。～ すなわち「この世界の物事の成り立ち、法則」「人間としての生き方」が解き明かされている。「迹門」は「智慧」の教えと言われている。

○「本門」とは：すべての物事を生かしている「久遠実成の本仏」を解き明かす。本仏とは「大慈悲」そのもの。したがって「本門」は「慈悲」の教えと言われている。

①出広長舌・すい こうちようぜつ — 二門信一にもん しんいつ

②毛孔放光・もく ほうこう — 二門理一にもん りいつ

③一時警欬・いちじ きょうがい — 二門教一にもん きょういつ

④俱共弾指・ぐ たんじ — 二門人一にもん にんいつ

⑤六種地動・ろくしゆ じどう — 二門行一にもん ぎょういつ

⑥普見大会・ふげん たいえ — 未来機一・みらい きいつ

⑦空中唱声・くうちゅう しょうしょう — 未来教一・みらい きょういつ

⑧咸皆帰命・かんかい きみょう — 未来人一・みらい にんいつ

⑨遥散諸物・ようさん しょもつ — 未来行一・みらい ぎょういつ

⑩通一仏土・ついでに ぶつど — 未来理一・みらい りいつ

・すべては一(いつ)

(P227・4行/P164・終2行)

理想であると同時に、仏さまによる保証でもあるのですが、これらのひとつひとつが、すべて「一(いつ)」という文字に貫かれていることを、あなたも心に深く印象されたことと思います。これは、ほかのどの宗教聖典にも見られぬ、素晴らしいことです。

『要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事・皆此の經に於て宣示顯説す』(三二八頁 終三行)

・如来の一切の所有の法

(P231・終4行/P168・7行)

法華經のなかには、如来の悟った一切の正法が述べ尽くされているのです。

・如来の一切の自在の神力

(P232・終5行/P169・4行)

如来の衆生済度の自由自在な力(自在の神力)が、法華經の中にみなぎっているという意味です。ですから法華經のどこを読んでも、一偈一句を読んでも救われるのです。

・如来の一切の秘要の蔵

(P233・終5行/P169・終2行)

如来はあらゆる物事の実相を見通しであり、あらゆる衆生の機根を知り分けているのですから、それぞれの場合に応じて適切な教を説いてくださるのです。

・如来の一切の甚深の事

(P234・終3行/P170・終5行)

これら一切の全てが法華經の中に説き示されているという意味です。

・結要付属(囑)/別付属(囑)

(P237・終6行/P172・終6行)

法華經を託し、計り知れない神力を全て本化の菩薩(地涌の菩薩)に授与するのだと、明らかに宣示顯説・せんじけんぜつされています。～ 〈要中の要(ようちゆう の よう)を結集して授け、委任する〉という意味です。

・道場観

(P243・終3行/P177・終6行)

『當に知るべし、是の處は即ち是れ道場なり。諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃したもう』 (三二九頁 五行)

『能く是の經を持たん者は 則ち爲れ已に我を見 亦多寶佛 及び諸の分身者を見 又我が今日教化せる諸の菩薩を見るなり』 (三三〇頁 四行)

『能く是の經を持たん者は 諸法の義 名字及び言辞に於て 樂説窮盡なきこと風の空中に於て 一切障礙なきが如くならん』 (三三〇頁 終三行)

『如来の滅後に於て 佛の所説の經の 因縁及び次第を知って～ 日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く～ 是の人佛道に於て 決定して疑いあることなけん』

・五綱教判

(P259・4行/P189・終5行)

日蓮聖人は以上の經文からヒントを得て、独自の見解をたてられ、次の五項目を立てられました。この五項目(五綱目)を「五綱教判・ごこうきょうはん」と言います。

「教・きょう」— 教のこと。法華經こそ真実の妙法なのです。

「機・き」— 機根のこと。法華經を實踐する者の理解力と実行力の程度をいいます。

「時・じ」— そのような機根の人々が世に出てくる時期のこと。時

「国・こく」— 正法が広まる地がどこであるか(仏さまがどこを選ぶか)ということ。

「序・じょ」— 法が説かれる順序のこと。

<囑累品の復習>

・囑累とは

(P271・1行/P199・1行)

「面倒を頼む」、「骨が折れる仕事を依頼する」という意味。つまり「法華經の流布(るぶ)を依頼する」ということです。それがこの品の題名になっています。

・総付属

この『囑累品』では、世尊があらゆる菩薩たちに対して法華經の流布(るぶ)を委嘱する『総付属』が説かれています。

『我無量百千萬億阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等應當に一心に此の法を流布して、廣く増益せしむべし』 (三三二頁 二行)

『今以て汝等に付囑す。汝等當に受持・讀誦し廣く此の法を宣べて、一切衆生をして普く聞知することを得せしむべし』 (三三二頁 七行/『教師資格証』)

— 私たちが仰ぎたてまつる『久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊』像のご本尊は、立像であり、光背(こうはい)に『多宝如来』と上首唱導(じょうしゅしょうどう)の師を配しておられます。この『尊いお姿』は、まさに『囑累品』で説かれる『総付属』の場面と同じ尊容だと申せます。

『如来は大慈悲あって諸の慳慳なく、亦畏る所なくして、能く衆生に佛の智慧・如来の智慧・自然の智慧を興う』 (三三二頁 終三行)

・法惜しみをしない

(P276・終3行/P203・終3行)

「慳慳(けんりん)なく」とは、「惜しむ心がない」という意味です。～

仏さまは、この〈得難い〉悟りを、いささかの慳慳(けんりん)もなく、～自分が悟ったことを、少しも惜しむところがない。

『如来は是れ一切衆生の大施主なり～慳慳を生ずることなかれ』 (三三二頁 終行)

『若し衆生あって信受せざらん者には、當に如来の餘の深法の中に於て示教利喜すべし』

・示教利喜

(P289・終2行/P213・4行)

これは、初心の人を正法へ導くための、合理的な順序・方法を教えられたものです。

①教えのあらましを示し。《示》

②相手が心を動かしたならばもっと深く教えの意味を説き。《教》

③教えを実践したら功德と利益(りやく)が得られるように導き。《利》。

④実践の結果、功德を得て、喜びと感動、生きがいを感じられるように導く。《喜》



<薬王菩薩本事品のあらすじ>

【娑婆世界で活躍する『薬王菩薩』のこれまでの積徳の行について質問】——

【三五頁 一行】『囑累品』で無数の菩薩たちが世尊から『総付属・そうぶぞく』を頂き、一同が大歡喜にひたっている時、宿王華(しゆくおうけ)菩薩が、世尊にお尋ねしました。

「世尊、薬王(やくおう)菩薩という菩薩が、この娑婆世界で衆生を自由自在に救う素晴らしいはた

らきをされていますが、それはおそらく、薬王菩薩が百千万億那由他(なゆた)という計り知れない数の難行苦行を積んでこられたからこそ、果たせるものではないかと推測します。世尊よ。どうぞこのことが正しいか。詳しくお教えいただけないでしょうか? もしこのことをお教えくださるならば、天人、竜神、鬼神、人間、人間以外の生き物たち、そして他の国土から来た菩薩や、この娑婆世界の出家修行者たちも皆、大いに歡喜するものと存じます」

【宿王華菩薩の質問に世尊が答える(薬王菩薩の過去世について)】——

【三三五頁 五行】するとその問に対して、**世尊**は**宿王華菩薩**にお答えになりました。

「無量恒河沙劫(むりょうごうがしやこう)という計り知れない昔、**日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)如来**という仏がおられました。その時、八十億という数多い大菩薩と七十二恒河沙(ごうがしや)という無数の大声聞がいました。そしてその仏の寿命は四万二千劫という果てしない期間であり、菩薩たちの寿命もまた、同じ長い期間を寿命としていました」

【三三五頁 終五行】「その国には、女人もいなければ、『怒り・貪り・愚痴・鬭争』の醜い心を持つ者もいません。そしてこれらのことから生ずる苦惱などありません。大地の地形は平らで、まるで掌(てのひら)のようで凹凸(おうとつ)がありません。しかも全てが宝石で設(しつら)えられ、美しい宝樹(ほうじゆ)が国土を飾り、宝石の幔幕(まんまく)が大地を覆(おお)っています。宝石で散りばめられた美しい旗が天空から垂れ下がり、宝玉(ほうぎょく)の瓶(かめ)や香炉(こうろ)が国中にあまねく満ち溢(あふ)れていました。その宝樹(ほうじゆ)の一本一本の木々には七宝の台座があり、**『一箭道(ひとやたけ)を盡(つ)くせり』**しかもその台座から弓矢の届く範囲に一つずつ台座がありました。そしてその台座には菩薩や声聞が坐し、それぞれの頭上にはたくさんの天人が飛来して、天の音楽を奏(かな)でて仏讃歌を歌い、供養を捧げています」

【三三六頁 五行】「そのとき、**日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)如来**は一切衆生慧見(いっさいしゆじょうきけん)菩薩をはじめとする多くの菩薩たちや声聞に**『法華經』**をお説きになられました。それをつぶさに伺った**一切衆生慧見菩薩**は自ら進んで苦行を修め、日月淨明德如来が説かれる教えを一心に学び修行し、精進を極めました。このような仏の悟りを求める修行が一万二千年間も続き、その修行の結果、**『現一切色身三昧(げんいっさいしんざんまい)』**という境地を得たのでした。この**『現一切色身三昧』**という境地は、『尊く相手に応じて、ふさわしい姿を現し、自由自在に法を説くことができる境地』を言います。そういう尊い境地を一切衆生慧見菩薩は得たのでした」

【三三六頁 終五行】「そのとき**一切衆生慧見(いっさいしゆじょうきけん)菩薩**は大いに歡喜して、次のように思いました。『私がこのように尊い境地を得ることができたのは、まさに**法華經**を聞かせて頂いたおかげだ。だからこそ日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)如来に感謝の供養をさせて頂こう』と決意しました」

【三三六頁 終五行】「そう決意した**一切衆生慧見菩薩**は即座に供養の三昧(さんまい)に入られ、大神力を用いて天上界に咲く曼陀羅華(まんたらけ)などの花々や、そしてわずかな量が地球一つに匹敵する尊い価値を持つ海彼岸(かいがん)の香(こう)や栴檀香(せんたんこう)を、空全体、雲が覆(おお)うように虚空(こくう)から香(こう)を降り注ぎ、仏を供養したのでありました」

【一切衆生熹見菩薩(藥王菩薩の前身)が『焼身供養』する】——

【三七頁 一行】「この供養を終え、三昧(さんまい)から立ち上がった一切衆生熹見(いっさいしゆじょうきけん)菩薩は、あらためて次のように思い直しました。／『我神力を以て佛を供養すと雖(いえど)も身を以て供養せんには如(し)かじ』『確かにこうした神通力による供養も大切だが、自分自身の“身を以て行う供養”の方が、より大切ではないだろうか?』。そう考えた一切衆生熹見菩薩は、／『諸(もろもろ)の華香油(けこうゆ)を飲むこと千二百歳を満じ已(おわ)って』 芳(かぐわ)しい香りがする梅檀(せんだん)をはじめとするさまざまな香油を千二百年間にわたって飲み続けました。その上、香油を身に塗り、天人の宝の衣を身にまとい、さらにその上に香油を注ぎ、日月淨明徳如来のみ前で【焼身供養(しょうしんくよう)】という自分の体に火を付けて自らが“燈明”となる供養をしました。するとその炎は、八十億恒河沙(ごうがしゃ)という無数の世界を照らし続けたのでした」
【三七頁 七行】「その光を見た諸仏(しよぶつ)は声をそろえて讚(たは)えました。『じつに立派である。／『是れ眞の精進なり、是れを眞の法をもって如来を供養すと名(なづ)く』 これこそが眞の精進、眞の供養である。たとえ美しい花々や香木、宝石の首飾り、焼香や身に塗る香(こう)、豪華な天蓋(てんがい)や幟旗(のぼりばた)、最高の香や豪華な品々、果ては宝や、国、城、妻子までを捧げる供養であっても、これに及ぶものはない。善男子よ、／『是(こ)れを第一の施と名(なづ)く。諸(もろもろ)の施の中に於て最尊(さいそん)最上なり、法を以て諸(もろもろ)の如来を供養するが故にと』 これこそが『第一の布施』である。なぜならば、それは教えをもって仏を供養することに他ならないからである』と、口々に一切衆生熹見菩薩を讚歎したのでした」

【諸仏が、一切衆生熹見菩薩の『焼身供養』を黙って見届ける】——

【三八頁 一行】「そしてこのように讚歎した諸仏(しよぶつ)は、一切衆生熹見菩薩の【焼身供養(しょうしんくよう)】の尊い姿を／『各(おのおの)黙然(もくねん)したもう』 じっと黙って見届けられ、その火は千二百年間も燃え続けました。こうして教えに対する供養を終えた一切衆生熹見菩薩は寿命を果たし、その後、再び日月淨明徳(にちがつじょうみょうとく)如来のみもとで淨徳王(じょうとくおう)という国王の子として生まれ変わりました。

【『焼身供養』した一切熹見菩薩が、日月淨明徳如来の世に生まれ変わる】——

しかも結跏趺坐(けっかふざ)という仏がお座りになられる姿をして生まれたのであります。このことはすなわち、生まれながらにして仏の大徳を有し、仏法を体得しているという意味にほかなりません。そして誕生するやいなや、王子は父王に偈(げ)を用いて次のように申し上げました」

【(偈)三八頁 六行】『大王よ。私はかつて日月淨明徳仏のもとで修行し、すぐに一切現諸身三昧(いっさいげんしよしんさんまい)という高い境地を得ることができましたが、／『大精進を勤行(ごんぎょう)して所愛(しよあい)の身を捨てにき』 そこでとどまらずさらに大精進をなして、我が身を捨てる“自己犠牲の行”を果たすことができました』

【三八頁 八行】「そして、この偈を終えると、さらに言葉を続けて父王に申し上げました。『日月淨

明德仏は今なお現(げん)におられます。私は過去世において仏さまを供養することによって、一切衆生が語る言葉を聞いてその者の心の奥を見抜く力《解一切衆生語言陀羅尼・いっさいしゅじょうごんだらに》という神力を得ることができ、その結果、八百千万億那由他(なゆた)を超える無数の法華經の偈を聞くことができました。そのために私は、生まれ変わって再び、仏さまのもとに赴(おもむ)き、感謝の供養を申し上げたいと願っているのです』と述べました。すると王子は七宝の台に座り、七多羅樹(しちたらじゅ)という高さの天空まで昇っていきました。そして日月淨明德如来の前に進み出て、額を仏のみ足に付けて礼拝し、合掌して次のように讚歎の偈を申し上げたのでした」

【(偈)三九頁 二行]『仏さまのお顔はこの上なく尊く、発する光明は十方世界を照らされています。私は再びお傍(そば)近くに参ることができました。誠に有り難いことでございます。お懐(なつ)かしゅうございます』とご挨拶しました」

【三九頁 四行]「そして一切衆生意見(いっさいしゅじょう きけん)菩薩は、心の底から感激して、さらに次のように申しあげました。 / 『世尊、世尊猶故(なお)世(よ)に在(まします)』 『世尊、世尊がこうして、この世におられるとは・・・』」

【三九頁 五行]「その時、日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)仏は一切衆生意見(いっさいしゅじょうきけん)菩薩にお告げになりました」

【三九頁 六行]『善男子よ。私は涅槃の時を間近に迎えています。そなたは私の最期(さいご)の床(とこ)を用意しなさい。じつは私は今晚、入滅を迎えるのです。善男子よ。 / 『我佛法を以て汝に屬累(ぞくい)す』これから仏法を説き弘めることをそなたに託したいと思います。諸々の菩薩や大弟子たち。そしてこの三千世界の宝のような美しい世界のすべても、あらゆる諸天善神も、すべてそなたに任せます。そればかりか、私の入滅後の遺骨も任せます。ですから世の人々にそれを分けて、世の人々が仏を供養できるようたくさんの仏塔を建てるように計らってください。このことはすなわち、仏舍利を供養することによって、一切衆生に仏を恋慕渴仰(れんぼかつう)する心を起こさせるために行うのです』とおおせつけになりました」

【三九頁 終二行]「そして日月淨明德如来はその言葉の通りその晩、入滅されました。一切衆生意見菩薩は仏の滅度を目(ま)の当たりにし、大いに悲しみ嘆きました。仏を恋慕(れんぼ)する気持ちはつのるばかりで、この世の中心にある須弥山(しゅみせん)の麓(ふもと)にある海岸に、栴檀(せんだん)という香木(こうぼく)を高く積み上げて仏さまを荼毘(たひ)に賦(ふ)しました。そして天空へとそびえる美しく輝いた八万四千の仏舍利塔を建てて供養しました」

【三四〇頁 五行]「その時、一切衆生意見(いっさいしゅじょう きけん)菩薩は心に深く思いました。『この立派な塔を建てる供養だけでは、 / 『我是(こ)の供養を作(な)すと雖(いえど)も心猶(な)お未だ足らず』とても仏に対する私の供養の心は満たされない。物足りない。もっと深く仏を供養しよう』と思ったのでした」

【三四〇頁 六行]「すると一切衆生意見菩薩は、諸々の菩薩や天界の神々や鬼神、そして一切の人々に対して告げました。『みなさん。一心に念じて下さい。私はこれから日月淨明德如来の舍利を供養申し上げます』と」

【生まれ変わった一切衆生熹見菩薩が、再び『焼身供養(両腕を灯明にする)』】——

【三四〇頁 終五行】「こう告げると一切衆生熹見菩薩は八万四千の仏舎利塔の前で自分の両腕に火をつけ、如来の徳を讃え、感謝する“燈明”としたのでした。この燈明は七万二千年間も燃え続け、迷いの闇を除く光明となったため、仏弟子たちは“仏の悟りに向かって精進する決意”を固めることができたのでした。と同時に無数の菩薩たちは、かつて一切衆生熹見菩薩が得た『現一切色身三昧』という境地。つまり自由自在に人々を導く力を得ることができたのでした」

【三四〇頁 終五行】「しかし諸々の菩薩や神々や鬼神たちは、一切衆生熹見菩薩の両腕が燃え尽きて無くしてしまったことを心配し、一同は嘆きました」

【三四一頁 二行】「それを見た一切衆生熹見菩薩は、みんなを慰め、次のように言いました。

『皆さん心配はいりません。確かに私の両腕は無くなってしまいましたが、その代わりに私は“金色の仏の身”を得ることができました。このことが真実ならば、私の両腕は必ず元通りになるでありますよ』

【『焼身供養』して燃え尽きた両腕が、自然に元通りになる】——

【三四一頁 四行】「そう言ったかと思うと、／『自然(じねん)に還復(げんぷく)しぬ』一切衆生熹見菩薩の両腕は、たちまちに元に戻ったのでした。これはこの菩薩が前世から積み上げて来た善行の功德が純粹無垢(じゅんすい むく)であり、具えている智慧が極めて奥深いものであったために、以上のような不可思議な現象が現われたのでした」

【三四一頁 六行】「すると全宇宙は感激によって六種に揺れ動き、天空からは美しい花びらが降り注がれ、全ての天人、人々は、かつて経験したことが無い感動を覚えました」

【釈尊が、『自己犠牲』の尊さを説き示す】——

【三四一頁 七行】以上の話を終えられると釈迦牟尼如来は、あらためて宿王華菩薩に語りかけられました。

【三四一頁 終四行】「この一切衆生熹見菩薩は、ほかでもありません薬王菩薩の前身なのです。薬王菩薩はこのように尊い『自己犠牲』による布施行を徹底的に果たされたのでした。よいですか宿王華菩薩よ。もし仏の智慧を得たいと望むならば、／『能(よ)く手の指・乃至(ないし)足の指(いっし)を然(とも)して佛塔に供養せよ』 自らの手の指一本、足の指一本でも良いから、それを燈明として仏塔に供養するのです。それは国や城、妻子や三千大千世界の山や池など全ての国土を捧げる供養よりも尊く、最も優れた供養なのです。あらゆる金銀財宝を捧げるよりも、自己犠牲による『法の実践』の方が、他に比較できないほど最高の供養なのです」

【三四一頁 終行】「それは三千大千世界に満ちるほどの七宝(しっぽう)、つまり金・銀・瑠璃(るり)・青紫色の宝石・磤磤(しゃこ・貝の一種 またはサンゴ)・瑪瑙(めう・エメラルド)・真珠・玫瑰(まいえ・赤色の宝石)などの宝を捧げ、仏と大菩薩、声聞と縁覚の仏弟子に供養したとしましょう。しかしそれによって得る功德というものは、／『其(そ)の福の最も多きには如(し)かじ』 法華經の短い一節でも信じて『自己犠牲』による功德と比べれば、まったく及びもつかない計り知れないものです」

【『法華經』の素晴らしさを、「十の譬え」をもって説き示す】——

【十諭称歎・じゅうゆ しょうたん】——

【三四二頁 三行】「宿王華(しゆくおうげ)よ。なぜそうなのかといえは、

【三四二頁 三行】① (『一切の川流(せんる)・江河(こうが)の諸水(しよすい)の中(なか)に、海爲(うみこ)れ第一なるが如く』) たとえば小川から大河に至るまで水と名の付くものの中で、なんととっても『海』が最大であるように、仏の数多い教えの中で『法華經』こそ、一番深く偉大な教えであるからです。

——【すべての教えを包容する】

【三四二頁 五行】② (『土山(どせん)・黒山(こくせん)～ 衆山(しゆせん)の中(なか)に、須彌山(しゆみせん)爲(こ)れ第一なるが如く』) またあらゆる山の中で『須彌山・しゆみせん』が第一であるように。

——【最高かつ中心となる教え】

【三四二頁 七行】③ (『衆星(しゆしやう)の中に月天子(がってんじ)最(もっと)も爲(こ)れ第一なるが如く』) 夜に輝く星の中で『月』が最も明るいように。

——【世を明るく照らす教え】

【三四二頁 終四行】④ (『日天子(にってんじ)の能(よ)く諸(もろもろ)の闇(やみ)を除くが如く』) 『太陽』の光がたちまちに全ての闇を打ち消すように。

——【不善の闇を照破する教え】

【三四二頁 終三行】⑤ (『諸(もろもろ)の小王(しょうおう)の中に、轉輪聖王(てんりんじやうおう)最(もっと)も爲(こ)れ第一なるが如く』) 諸々の王の中で『轉輪聖王・てんりんじやうおう』が最高であるように。

——【感化力第一の教え】

【三四二頁 終二行】⑥ (『帝釋(たいしやく)の三十三天の中に於て王なるが如く』) 三十三の守護神の中で『帝釈天』が最高であるように。

——【救済者中の救済者】

【三四三頁 一行】⑦ (『大梵天王(だいぼんでんのう)の一切衆生の父なるが如く』) 『大梵天王(だいぼんでんのう)』があらゆる者の父であり、あらゆる智者・修行者・菩薩を仏道へ導くように。

——【仏道へ導く父・仏教の包容性】

【三四三頁 二行】⑧ (『一切の凡夫人(ぼんぷにん)の中に～是(こ)れ第一なるが如く』) 『仏の教えを信じ、護持する者』が、一切衆生の中で第一の存在であるように。

——【一切衆生中第一の人間】

【三四三頁 四行】⑨ (『一切衆生の中に於て亦爲(またこ)れ第一なり』) 菩薩・声聞・縁覚をはじめとする仏弟子の中で『菩薩』が第一の存在であるように。

——【独善的でない菩薩第一】

【三四三頁 終五行】⑩ (『佛は爲(こ)れ諸法の王なるが如く』) 『仏』がすべての教えの王であるように。

——【諸經の王】

【三四三頁 終四行】(『諸經(しよきやう)の中の王なり』) 『法華經』こそが“諸經の王”なのであります

—— 【十諭称歎・じゅうゆ しょうたん】

【『法華經』の素晴らしさ。乾ける者の水であり、子における母……】——

【三四三頁 終四行】**釈尊**はさらに説かれます。「宿王華菩薩よ。よいですか。／(『此の經は能(よ)く一切衆生を救いたもう者なり。～諸(もろもろ)の苦惱を離れしめたもう。此の經は能(よ)く大(おおい)に一切衆生を饒益(にやうやく)して、其(そ)の願(がん)を充滿(じゅうまん)せしめたもう』) この『法華經』は一切衆生を救い、苦惱から離れさせ、豊かな尊い利益を与え、その願いを満足させるものであります。

それはあたかも、喉(のど)の渇きに苦しむ者が池の清水を飲んで満足するように、寒さに震(ふる)える者が温かい火を得て満足するように、裸の者が着物を得たように、長旅をする商人が優秀な案内人を得たように、子が母と出会えたように、渡し場で船を見つけることができたように、病人が医師と出会えたように、貧しい者が宝を得たように、人民が素晴らしい統治者を得たように、貿易者が平穏な海路を見つけたように、松明(たいまつ)の火が闇を消し去るように、この法華経もちょうどそのような素晴らしい力を持つものであります。／『能(よ)く衆生をして一切の苦・一切の病痛(びょうつう)を離れ、能(よ)く一切の生死(しょうじ)の縛(ばく)を解(と)かしたもう』『法華経』は、一切衆生の悩み・病気による苦を取り除き、生死(しょうじ)の輪廻の束縛から解き放つものです」

【『法華経』を実践し、讚歎する功德は計り知れない】——

【三四頁 五行】「もしある人が法華経を聞くことができ、自ら書写するばかりでなく、人にも書写させたとしましょう。その人の得る功德というものは、／『所得の功德、佛の智慧を以て多少を籌量(ちゆうりょう)すとも其(そ)の邊(ほとり)を得(え)じ』 仏の智慧を以てしても計り知ることができないほど、極めて大きいのです。もしある人が、経巻を書写して、それに花を捧げ、香を焚き、香油を捧げて供養したとしましょう。／『所得の功德亦復(またまた)無量ならん』 その功德は計り知ることにはできません」

【三四頁 終四行】「宿王華よ。もしある者がこの『薬王菩薩本事品』を聞くことができたならば、その功德は計り知れません。そしてこの教えをしっかりと受持することが出来た女性は、／『是(こ)の女身を盡(つ)くして後(のち)に復(また)受けじ』『男女の差別』で苦しむようなことなど無くなります」

【三四頁 一行】『若(も)し如来の滅後、後(のち)の五百歳の中に』「もし如来の入滅後500年経ち、そこに一人の女性がこの法華経を聞いて実践するならば、／『即(すなわ)ち安樂世界(あんらくせかい)の阿彌陀佛(あみだぶつ)の大菩薩衆の～蓮華の中の寶座(ほうざ)の上に生ぜん』 阿彌陀如来が多くの大菩薩衆に囲まれている“極樂世界”に生まれ変わることができるであります。この經典を受持する者は、貪欲や怒り、本能に赴(おもむ)くままに行動する愚かさ(貪とん・瞋じん・痴ち)に苦しむことはありません。またおごり高ぶる心やねたむ心、さまざまな迷いに苦しむこともありません」

【『法華経』によって『空(くう)』を知るものは無数の仏を見る者】——

【三四頁 五行】『菩薩の神通・無生法忍(むしょうぼうにん)を得(え)ん』「またその人は、菩薩としての神力を具え、一切が「一つ」であるという『空』の教えを体得し、さまざまな現象世界の“変化”に惑(まど)わされることのない境地(『無生法忍(むしょうぼうにん)』)に達します。そのために何ものにもとらわれない・片寄らない澄(す)み切った清浄な『もの見方』を具えるようになり、七百万二千億那由他恒河沙(なゆたごうがしゃ)という数え切れない数の『仏を見る』ことができるようになります。ですから、そのような人に対して、／『是(こ)の時に諸佛、～善哉善哉(ぜんざいぜんざい)、善男子、汝能(なんじよ)く釋迦牟尼佛の法の中(なか)に於て』 あらゆる諸仏が、口をそろえてその人を讚える

でありましょう。『よろしい。よろしい。善男子よ。そなたは釈迦牟尼仏の教えに従い、**法華經**をしっかりと受持し、**《五種法師の行》**をよくぞ実践されました。／『**所得(しよとく)の福德(ふくとく)無量無邊(むへん)なり。火も焼くこと能(あた)わず、水も漂(ただよ)わすこと能(あた)わじ。汝が功德は、千佛共(とも)に説きたもうとも、盡(つ)くさしむること能(あた)わじ**』そのため計り知れない功德を得るでしょう。その功德は確固たるもので、火にも焼かれず、水にも流されない強固なものです。そなたのなした功德は、**千の仏が一緒になって法をお説きになっても、尽くすことのできないほど甚大な功德**です。／『**諸(もろもろ)の魔賊(まぞく)を破(は)し、生死(しょうじ)の軍を壊(え)し、諸餘(しよよ)の怨敵(おんてき)皆悉(みなことごと)く摧滅(さいめつ)せり**』あらゆる魔を打ち払い、現象の変化という難敵を克服し、あらゆる心の敵をすべて打ち砕くことができます。ですから善男子よ。／『**百千の諸佛、神通力を以て共に汝を守護したもう**』**法華經を實踐する者は百千の諸仏が守護するのです**」

【三四頁 終行】「一切世間の天人や人間のなかで、そなたに及び者はいません。如来を除いて、声聞や縁覚、菩薩などの仏弟子も、そなたが得た智慧と禅定の深さに及び者はいません」

【三四頁 二行】「**宿王華**よ。よいですか。この『**薬王菩薩本事品**』を聞いて心から有難いと思ったならば、／『**口の中(うち)より常に青蓮華(しょうれんげ)の香(か)を出(いだ)し、身の毛孔(もうく)の中(なか)より常に牛頭梅檀(ごつせんだん)の香(か)を出(いだ)さん**』その人は**口から常に青蓮華(しょうれんげ)の香りを放ち、体全体の毛穴という毛穴全てから牛頭梅檀(ごつせんだん)の香りを放つが如く“周囲の人々を感化させ、高い徳と善へと導く”**ことでありましょう。その人の得る功德というものは、このように素晴らしいのであります」

【『自己犠牲』の尊さを説く『薬王菩薩本事品』を説き広めることを勧める】——

【三四頁 六行】「そのようなわけで、**宿王華**よ。／『**此の薬王菩薩本事品を以て汝に屬累(ぞくるい)す**』この『**薬王菩薩本事品**』を説き広めることをそなたに任せます。どうか後の五百歳において聞いて広くこの地球上において法を説き広め、魔や悪鬼がすべての人々の心を迷わすことのないように、教化をそなたに任せたいのです」

【三四頁 八行】「**宿王華**よ。あなたは、あらゆる力・神力を尽くしてこの教えを護(まも)らなければなりません。なぜならば、／『**此の經は則(すなわ)ち爲(こ)れ閻浮提(えんぶだい)の人の病(やまい)の良薬(りやうやく)なり**』この教えは世界人類の心の病の『良薬』であるからです。もし心の病を持つ人がこの法華經を聞くことができたならば、その病いはたちまちに消滅して、老死の苦しみから解脱することができるでありましょう」

【『薬王菩薩本事品』を説き広める者が得る功德】——

【三四頁 終二行】「**宿王華**よ。そしてこの法華經を受持する者を見たならば、青蓮華(しょうれんげ)を以って供養しなさい。そして次のように念じなければなりません。『この人は、長い年月を待たずして仏の悟りの座に坐し、魔の軍隊を退かせ、仏の智慧に達するであろう。そして、ほら貝を吹き鳴らし、鼓(つづみ)を打ち鳴らすように、遙か遠い地にまで法を説き広めるように一切衆生をあらゆる人生苦から解き放つであろう』と念じるのです」

【三四七頁 四行】 このように『**薬王菩薩本事品**』をお説きになりますと、教えを聴聞(ちようもん)していた八万四千におよぶ菩薩たちは、《**解一切衆生語言陀羅尼・げいっさいしゆじよう ごこんだらに**》という相手の心を見抜き、それに適切な教えを説く力を得ることができました」

【(宝塔の中にいる)多宝如来が、薬王菩薩の徳を尋ねた宿王華菩薩を讃歎】——

【三四七頁 五行】 (『**多寶如來寶塔(ほうとう)の中(うち)に於て、宿王華菩薩を讚(ほめて言(のたま)わく、善哉善哉(ぜんざいぜんざい)、宿王華(しゆくおうけ)、汝(なんじ)不可思議の功徳を成就して**』) その時、**多宝如来**が宝塔の中から声が發せられ、**宿王華菩薩**を讃えたのであります。

「善いかな。善いかな。宿王華よ。そなたはよくぞ**釈迦牟尼仏**に大事な質問をしてくれました。そなたは計り知ることのできないほどの素晴らしい功徳を成就したことになります。そなたが質問したことによって、一切衆生すべてが教えの尊さを知ることになり、それによって衆生が尊い功徳を得ることができるからであります。本当に素晴らしいことです」と**宿王華菩薩**の素晴らしいさを**多宝如来**が“証明”したのでした。



じつれい じっせん 実例こそ実践をうながす

(P306・2行/P225・終2行)

「実践」ということが、言うのは優しいけれども、凡夫にとってはなかなか容易ならぬことなのです。～ほんとうに実践するとなると、やはりもう一つダメ押しが必要なのです。そのダメ押しとは何かと言えば、～何と云っても「**実例**」が一番です。

ほきつ しゆじよう もはん 菩薩は衆生の模範

(P308・1行/P227・1行)

凡夫には手本が必要です。仏の道を実践するには誰を手本にしたら良いかといえば、もちろん「お釈迦さま」です。ところが、お釈迦さまは「完全無欠」なお方であって、～凡夫の身としては、どこから真似していいか、とまどいを覚えざるをえません。それに対して「菩薩」は一つの徳、一つの徳の行いを特徴的に現わされているので、我々にとっては丁度いい目標、手ごろな手本になります。

～二十三番以降のお経には、主としてそれらが述べられているのです。

じ じぎせい 自己犠牲について

(P312・終3行/P230・5行)

自己犠牲の精神こそ、人間のいちばん高貴な精神なのであります。～大勢の利益のためには、自分の欲望はある程度犠牲にする。～人間にとって**自己犠牲ほど高貴な精神**ない。

しゆい 《**息遣のひととき** ①》

自己犠牲の精神こそ、人間のいちばん高貴な精神だと庭野開祖は説きます。
— この「自己を犠牲にするとは何か?」。そして、「今の自分にとっての自己犠牲とは何をすることか?」。考えてみましょう。

げんいっさいしきしんざんまい
現一切色身三昧

(P331・終3行/P244・7行)

《**現一切色身三昧**》というのは、導く相手に応じて、それにふさわしい姿を現じ、それにふさわしい教えを説く、自由自在な力が身にそなわった境地を言います。～ なるべく私というものを捨て、できるだけ無我の心になってやれば、あまりひどい間違いは起こさないものです。しかも、そういった無我に成りきる訓練を、常に自分自身に課し、それを繰り返していくうちに、少しずつ「**現一切色身三昧**」に近づいていくものなのであります。

『われじんりき もつ ほとけ くよう いえど み もつ じくよう し
『我神力を以て 佛を供養すと 雖も 身を以て供養せんには如かじ』 (三三七頁 二行)

こうして神力によって仏さまを供養するよりも、自分の身を以て供養する方が大切なのではないだろうか。

こ しん しょうじん こ しん ほう によらい くよう なづ
『是れ眞の精進なり、是れを眞の法をもって如来を供養すと名く』 (三三七頁 終五行)

しん ほう によらい くよう
眞の法をもって如来を供養す

(P340・1行/P251・6行)

自己犠牲の行為によって、仏法のすばらしさを世の人々にまざまざと見せ、帰依の心を起こさせることこそ、「**本当の供養**」である。

《**思惟のひととき ②**》

供養には「**利供養**・りくよう/**敬供養**・きょうくよう/**行供養**・ぎょうくよう」の三種があり、そのなかでも教えを実践する供養、すなわち「**自己犠牲の行為によって行う『行供養』にそ、『本当の供養]である**」と庭野開祖は説きます。

— 私は「法の実践をする『**行供養**』」を実践しているか? 「自己を犠牲にするという“**我を無くした**”法の**実践**」を、どこまで実践しているか? 振り返ってみましょう。

もく ねん
黙 然

(P343・終3行/P254・7行)

仏さまがご説法をなさるのも、もちろん有難いことですが、ただじっと黙って座っていらっしやることにも、無量の深い意味があります。

《**思惟のひととき ③**》

『**默然**・もくねん』とは:「じっと黙っている」の意味です。人は「何を言うか?」「何を言葉にするか?」も大切ですが、「何を言わないか?」も大切であると言えます。

この「黙る」という「**默然**」について、少し考えてみましょう。

しょうあい み す
『所愛の身を捨てにき』 (三三八頁 七行)

所愛の身を捨てにき

(P347・2行/P257・4行)

いい言葉です。誰しも自分を愛(いと)しくない人はありません。～ ほかの生物と違って、「精神」というものを持ち、「相互扶助・共存共栄」の社会生活を営む、一段高い生物である人間には、その高さのゆえにその大切な自分というものを犠牲にしなければならぬことが多いのです。～ もしそれがなかったら、鳥や獣(けもの)や虫の生き方と少しも変わりはないものになりましょう。

《思惟のひととき ④》

「精神」というものを持つ人間は、大切な自分というものを犠牲にする(『自己犠牲』する)ことは、人間の社会では多いもので、この『自己犠牲』をしなければ、鳥・獣・虫と変わりはないと庭野開祖は説きます。

《思惟のひととき ①》でも確認しましたが、この『自己犠牲』することをかみ締めてみましょう。(例:「鳥・獣・虫と変わりはない」ということは、『畜生界』と同じ?)

『是の誓(ちかひ)を作し已(おわ)って自然(じねん)に還復(げんぶく)しぬ』 (三四一頁 四行)

自然に還復しぬ

(P368・2行/P274・2行)

(焼き尽くしてしまった両腕が)また元通りになったということは、自己犠牲の行為によって、自己はけっして損(そな)なわれもしないし、マイナスをこうむるものでもない。～ 肉体を損減(そんげん)したからといって、人間の本質である『仏性』は決して損(そな)なわれもしなければ、減りもしないのです。

《思惟のひととき ⑤》

『自然(じねん)に還復(げんぶく)しぬ』。真心からの「自己犠牲」は、それは単に「犠牲」に終わらず、たちまちに戻ってくる(復元する)と説かれています。

— この「復元する」ということ、そして「自己犠牲」について考えてみましょう。

『能く是(よこ)の經典(きょうてん)を受持(うけもち)することあらん者(もの)も亦(また)復是(またこれ)の如(ごと)し。一切衆生(いっさいしゆじやう)の中に於(おい)て亦(また)爲(な)れ第一(だいいち)なり』 (三四三頁 五行)

じゅうゆしょうたん 十諭称歎

(P373・終2行/P279・終2行)

法華經の素晴らしさを十の譬(たと)えて説かれる。

- ①【すべての教えを包容する】『一切の川流・江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く』
(三四二頁 三行)
- ②【最高かつ中心となる教え】『土山・黒山～衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く』
(三四二頁 五行)
- ③【世を明るく照らす教え】『衆星の中に月天子最も爲れ第一なるが如く』 (三四二頁 七行)
- ④【不善の闇を照破する教え】『日天子の能く諸の闇を除くが如く』 (三四二頁 終四行)
- ⑤【感化力第一の教え】『諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く』
(三四二頁 終三行)
- ⑥【救済者中の救済者】『帝釋の三十三天の中に於て王なるが如く』 (三四二頁 終二行)
- ⑦【仏道へ導く父・仏教の包容性】『大梵天王の一切衆生の父なるが如く』 (三四三頁 一行)
- ⑧【一切衆生中第一の人間】『一切の凡夫人の中に～是れ第一なるが如く』 (三四三頁 二行)
- ⑨【独善的でない菩薩第一】『一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり』 (三四三頁 六行)
- ⑩【諸經の王】『佛は爲れ諸法の王なるが如く』 (三四三頁 終五行)

『諸經の中の王なり』『法華經』こそが“諸經の王”なのであります」

法華經を受持する者は一切衆生のなかで第一の存在であると説かれている。～とりもなおさず我々のことです。ですから、我々は“一切衆生の中で第一の人間”なのです。

《息惺のひととき ⑥》

庭野開祖は『法華經』に巡り合えた私たち、法を実践する私たちは、『一切衆生の中で第一の人間』である」と説きます。 — このことをかみ締めてみましょう。

『此の經は能(よ)く一切衆生を救いたもう者なり。～ 諸(もろもろ)の苦惱を離れしめたもう。此の經は能(よ)く大(おおい)に一切衆生を饒益(にょうやく)して、其(そ)の願(がん)を充滿(じゅうまん)せしめたもう』(三四三頁 終三行) この『法華經』は一切衆生を救い、苦惱から離れさせ、豊かな尊い利益を与え、その願いを満足させるものであります。

其(そ)の願(がん)を充滿(じゅうまん)せしめたもう

(P392・1行/P294・3行)

願は、決して「物質的な満足を得たい」とか、「安樂な暮らしをしたい」というような、目先の望みではありません。～

(仏教でいう願とは) 第一に、究極において、「人のため世のため」になろうという「利他の願」であるということです。

第二に、理想の達成を強く願い、固く誓う、その「決意」の点にあります。

《息(いき)のひととき ⑦》

庭野開祖が説くこの『願』の第一「人のため世のためになろうという利他の願」(物質的満足を求め、安樂に暮らしたいという望みではない)、第二「理想に向けて固く誓う願」と比べて、私の持つ『願』に違い、開きがあるでしょうか? ふり返ってみましょう。

『能く衆生をして一切の苦・一切の病(びょう)痛(つう)を離れ、能く一切の生死(しょうじ)の縛(ばく)を解(と)かしめたもう』『法華經』は、一切衆生の悩み・病気による苦を取り除き、生死(しょうじ)の輪廻の束縛から解(と)き放つものです。 (三四四頁 四行)

『諸(もろもろ)の魔賊(まぞく)を破(は)し、生死(しょうじ)の軍(ぐん)を壊(え)し、諸餘(しよよ)の怨敵(おんてき)皆(みな)悉(ごいめつ)く摧滅(さいめつ)せり、善男子(ぜんなんし)、百千(ひゃくせん)の諸佛(しよぶつ)、神通力(しんつうりき)を以て共に汝(なんぢ)を守護(しよご)したもう』(三四五頁 終二行) あらゆる魔を打ちほらい、現象の変化という難敵を克服し、あらゆる心の敵をすべて打ち砕くことができます。ですから善男子よ。法華經を實踐する者はあらゆる諸仏が守護するのです」

『是(こ)の人(ひと)、現世(げんせい)に口(くち)の中(うち)より常に青蓮華(つね)の香(しょうれんげ)を出(い)し、身(み)の毛孔(もうく)の中(なか)より常に牛頭梅檀(つね)の香(ごづせんたん)を出(い)さん』 (三四六頁 四行)

その人の語る言葉によって周囲の人々を「自然に感化」し(青蓮華の香を出し)、高い徳分が行動に現れて「自然と感化」(身の毛孔の中より常に牛頭梅檀の香を出さん)するようになるのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑧》

『口の中(うち)より常に青蓮華(しょうれんげ)の香(か)を出(いだ)し ~常に牛頭梅檀(ごづせん だん)の香(か)を出(いだ)さん』 — 日頃の私はどのような香り「言葉」を「口」から発していますか? どのような香りの「態度」を「体」から発しているのでしょうか? 振り返ってみましょう。

薬王菩薩本事品の要旨

(P433・終4行/P326・終3行)この

品で教えられている要旨は一

- 一、人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない。
- 二、実践こそが教えに対する最高の供養。

(この品を受持する功德が強調して説かれていますか) これは、**教えは実践して初めて生きるものであり、身を以てする「法華経の実践の尊さ」を主眼に置いたものであるからです。** (P399・終2行/P300・4行)

《^{しゆい}思惟のひととき ⑨》

薬王菩薩本事品の「要旨」である ①「人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない」
②「実践こそが教えに対する最高の供養」について、かみ締めてみましょう。

《^{しゆい}思惟のふいかえり まとめ》

今日の『薬王菩薩本事品第二十三』の学びを通して、何を学び取ったか?
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌